

祖父の卒業証書

小串 和夫

学校法人皇學館理事長

私の手元に1900(明治33)年3月31日付けの「神宮皇學館本科卒業證書」がある。「本館規定ノ學科ヲ修了セリ依テ之ヲ證明ス」とあり、教監と教頭の氏名と公印、更に「右證明ノ正確ナルヲ稟申ス」とある。続いて館長、副館長の氏名と公印、そして最後に「薦告ニヨリ茲ニ卒業證書ヲ授与セシム」の文言と神宮皇學館総裁邦憲王の御名、公印。実に重々しく立派なものである。

さて神宮皇學館は1882(明治15)年に伊勢神宮の林崎文庫に開設された学問所を起点とする。日本古来の神典や国文、国史を研究し、神職の養成も行う機関であった。神宮祭主で皇學館総裁であった賀陽宮邦憲王より「皇国ノ道義ヲ講シ、皇国ノ文学ヲ修メ、之ヲ實際ニ運用セシメ、以テ倫情ヲ厚ウシ文明ヲ補ハントスルニ在リ」との令旨を賜っている。すなわち、わが国の歴史と伝統に根ざした道義と学問を学び、日本人としての正しい自覚を確立して実社会での運用に努め、文明の発展に貢献

することを建学の精神としている。現在の本学にもこの根本精神は色褪せることなく受け継がれている。その後神宮皇學館は1903(明治36)年には内務省所管の官立専門学校となる。1940(昭和15)年文部省所管の官立大学となった。しかしながら1946(昭和21)年に、1882(明治15)年4月創設以来64年の歴史が中絶したのである。所謂敗戦後GHQにより発令された神道指令で、廃学のやむなきに至ったのであった。しかし先人たちのご尽力により1962(昭和37)年に再興され、来年は創立140周年、再興60周年の節目の年にあたる。私は再興された皇學館大学の第1期生である。初代総長は元総理大臣の吉田茂氏であった。葉巻を啜る姿を入学式当日に目の当たりにした記憶が鮮明に甦る。開学時は文学部1学部で国文、国史2学科で学生数は100名足らず、施設も学舎1棟のみ、然も未だ工事中であった。入学式も隣接する公立高校体育館を借用して行われた。寮生活を原則と

していたが建設中で、市内に借り上げた民家に分散していた。60年経て現在は大学院、高等学校、中学校が設置され、時代の要請に応えうる学園として成長をとげてきた。大学は文学部に加えて教育学部、現代日本社会学部を加えた3学部で構成される。キャンパスも一新された。

私は卒業と同時に家職を継ぐべく神社界に身を置くことになった。東京乃木神社、郷里の多度大社、熱田神宮の奉職を経て、2018（平成30）年に50有余年になる神職生活にピリオドを打った。その私が昨年4月凶らずも理事長の大役を担うことになったのである。学校経営には門外漢であり暗中模索の日々、さらに新型コロナウイルスの蔓延が終息をみないなか、活動もままならず、忸怩たる想いで1年余が過ぎた。考えるに学校法人の経営も宗教法人の運営もある点において共通するところがある。建学の精神に則った教育、研究のいわゆる教学面を堅持することと経営。宗教法人においては、歴史、伝統、文化に依ってたつ信仰を守るこ

とと法人の運営。聖なる部分と俗なる部分の二面性があり、そのバランスを取りながら運営にあたるという点に類似性がある。

さて先述の「卒業證書」は実は私の祖父のものである。私の家は代々神職を家職としてきた。昨年屋敷内の土蔵の調査が行われたおり、古文書の入った長持の中にあつたもので、この卒業證書は皇學館大学に現存する中でも一番古いとのことである。祖父は9期生の卒業である。草創期は入学者が無い年もあつたようで、9期卒生は2名であつたという。

今この「卒業證書」は理事長室にある。学校法人を取り巻く環境はどこも非常に厳しいものがある。18歳人口は20年後には90万人を割り込み、大学進学者数も50万人になるだろうと予想されている。特に地方大学はさらに厳しい状況におかれる。卒業證書を見ていると祖父が叱咤激励してくれているようで、この長い歴史、伝統の灯を一度と消してはならないとの決意を日々あらたにしている。